



外海府の景勝地・大野亀付近

「か」。計良さんは心配でたまらない。事務局の平原匡さん(31)は新潟県上越市出身。大学の専攻が古い建築の研究でNPO佐渡文化財研究所の事務局長。能舞台などの調査で佐渡に任み着いた。村々に伝統芸能が根付いており、能舞台も32カ所が残る。この制度、仕組みをもっと島おこしに活用出来ないか、と考えている。

高橋忠さん(65)トシ子さん(65)夫妻の「寄れっ茶屋」に登録。盛岡市で建築会社に勤め、定年で3年前に移住。旅行で佐渡が気に入った。海を見ていると奥



「佐渡國しま海道」計良さん(左)と事務局の平原さん(右)

復帰や保護を支援する。「日常の中でトキと共生し、無理せず活動を続けるには時々の応援がいい」と名付けた。賛助会員は「トキたま応援団」だ。

空舞うトキ 帰ろう昔の島に

阿弥の足跡(古代・北陸道)など中世野生定着を目指す「試験道」など中世放鳥」の第一歩だ。人と武家文化▽金

定された。「雪や寒さで餌が取りにくくなる冬場」に10羽は無事に乗り切れ

日本一大きな島、新潟県佐渡島。9月25日、四半世紀の時を超え27年ぶりに10羽のトキが空に舞った。絶滅からの再生。2015年までに60羽の野生定着を目指す「試験放鳥」の第一歩だ。人と武家文化▽金

「寄れっ茶屋」の発案者、NPO循環の島研究室代表の十文字修さん(48)も、神奈川での役所勤めを辞め「人生の後半は別の世界で過ごしたい」とエトーン移住。「佐渡島無限海道」海辺の昔いま・未来に出合う島一周の道づくり」を掲げ、活動に参加した。

日本風景街道 一輝く人たち

7



放鳥後、飛翔するトキ



トキが放たれた棚田。冬も水を張り、餌が取りやすいよう気を配る

「寄れっ茶屋」の発案者、NPO循環の島研究室代表の十文字修さん(48)も、神奈川での役所勤めを辞め「人生の後半は別の世界で過ごしたい」とエトーン移住。「佐渡島無限海道」海辺の昔いま・未来に出合う島一周の道づくり」を掲げ、活動に参加した。

「君の名は」のロケ地という景勝地で、十文字さんはこれをもじって「岩・巨岩を紹介する」の名は「プロジェクトを始めた。



旅行者が気軽に立ち寄れる「寄れっ茶屋」の高橋さん夫妻



トキの餌場、ピオトープの整備をするトキたま応援団のボランティア



植田さん(左)の作ったどぶろくを見せる十文字さん(右)

「佐渡國しま海道」運営委員でエトーンツアーガイドもする重政治巳さん(69)は「エトーンツアーを管理して入山制限するが、無断立ち入りも多し」。

周辺の山には杉の巨木など原生林が残る人跡未踏の領域も。新潟大学が管理して入山制限するが、無断立ち入りも多し」。

四囲が海だけに魚介類は新鮮で、特産の牡蠣(かき)や寒ブリは今からの旬。魚の旨い土地は酒も旨い。佐渡市トキめき濁どぶろくが作りたくて農家民宿を始めた。作る酒を味わってほしいから、寄れっ茶屋に「エコの島でスローストック」文化があり滞在・体験型旅行にうってつけの佐渡國しま海道」活動を支